

校注『般若心経慧忠注』

程 正

(一) 『般若心経慧忠注』について

周知のように、玄奘訳『般若心経』に対する注釈書が数多く存在する。百種を超えともいわれる注釈書の中では、現在知られている、初期禅宗（唐代）の人々の手によってなされたものが、以下の五本である。

- 1、智詵撰『般若心経疏』
- 2、浄覚撰『般若心経注』
- 3、慧忠撰『般若心経注』（以下『慧忠注』）
- 4、智融撰『般若心経注』
- 5、達摩撰と仮託される『般若心経頌』

今回取り上げた『慧忠注』は、まさにこの五本の一つに当たるものである。

南陽慧忠（？～七七五）は、青原行思、南嶽懷讓、荷沢神会、永嘉玄覺とともに六祖慧能門下の五大宗匠とされる人物であり、また最もはやく唐王朝の中枢に進出を果たした南宗

禅の禅僧の一人でもある。唐の肅宗と代宗の二代皇帝の国師として長年活躍した慧忠には、無情説法をはじめ、数多くの公案機縁が残されているが、著作として今日残されているのが、この『慧忠注』のみである。すなわち、『慧忠注』が慧忠の禅風思想を窺い知るには、極めて貴重な資料といえよう。

従来、伝世資料として広く知られている『慧忠注』は、独立したのではなく、宋代の芙蓉道楷、慈受懐深のものとあわせて『般若心経三註』と称して、『中統藏経』に収録されている。そこから『慧忠注』を抽出し、本文校訂や資料紹介をされたのは、宇井伯寿氏である（以下、宇井本）。その後、古田紹欽氏が朝鮮隆熙二年（一九〇八）の刊本『慧忠注』を発見し、その本文校訂（以下、隆熙本）を「隆熙二年版南陽慧忠注『摩訶般若波羅蜜多心経』」と題した論文³に附して学界に紹介された。

ところが、最近ロシア蔵黒水城（ハラホト）文献が公刊され、

その中に筆者は、金刻本とされる刊本『慧忠注』TK116号の一本(以下、黒水城本)があることを発見した。³⁾元来は冊子本で、見開きの状態では、両端の破損がひどく、それによって題名や刊記などが欠けてしまったものの、序文を含み、『慧忠注』の本文内容の約八割以上が読み取れるのである。この黒水城本の出現によって、中国、朝鮮、日本のいずれにも『慧忠注』の版本があったことになり、かつて「中国本土には『慧忠注』の伝本なし」との見解⁴⁾が完全に覆されたのである。そこで、筆者がこれらの三本のテキストを対照した結果、最も古いと思われる黒水城本は、ほかの二本と比べて見出しの付け方や文字の異同等の面において、かなり相違のあることが判明した。それ故に、まず黒水城本を底本とし、宇井本と隆熙本の二本を校本とした、新たなテキストの作成を試みることにした。さらにこれを和訳し、語注をつけて完成したのが、本稿である。また、文献学の立場からのこれら三本の『慧忠注』に対する検討は、別の機会に委ねることにしたい。

附記：

なお、本稿は筆者のかつての指導教授である田中良昭先生の指導のもとに作成したものである。

(1)「南陽慧忠の心経註疏」(『禅の論攷』(鈴木大拙博士喜寿

記念論文集)(岩波書店、一九四九年)六九〜八二頁。

(2)金知見・蔡印幻編『新羅仏教研究』(山喜房仏書林、一九七三年)三六一〜三六九頁。

(3)『俄蔵黒水城文獻 ③』(俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所・中国社会科学院民族研究所・上海古籍出版社編(一九九六年一月))。

(4)方広錫『般若心経訳注集成』(上海古籍出版社、一九九四年)二二頁。

(二)『般若心経慧忠注』の本文校注

凡例：

底本：黒水城本

A本：隆熙本(古田紹欽校定本、序文なし)

B本：宇井本(宇井伯寿校訂本、序文あり)

C本：『金石続編』本(序文のみ、『金石続編』巻一四に収録されている北宋の大中祥符二年(一〇〇九)に刻せられた金石文)

なお、校定では、恵↓慧、導↓礙、无↓無、盤↓槃のような異体字を正字に統一した。

底本が断欠し、しかもA本、B本の文意とは大差があつて、校合の不能な場合には、□でその断欠した文字を表記した。

底本が断欠していても、校本或いは文意により補いえた場

合には、補った文字を（ ）で囲んだ。

本文の校注の番号は、校訂本に附して、段落ごとに示し、

語注の番号は、和訳本に附して、巻末に一括して掲載した。また、句読点は、すべて筆者が加えたものである。

般若波羅蜜多心経序^{※1}

唐南陽国師慧忠著

夫[※]法性無辺。豈籍心之所度。真如非相。詎[※]假言之所詮。是故、衆生浩^{※4}瀚、法海渺^{※5}茫何極。若也広尋文義、猶如鏡内求形。更^{※6}乃息念觀空、又似日中逃影。

般若波羅蜜多心経の序

唐の南陽国師慧忠^{注1}著

夫^{注2}れ、法性は無辺なり。豈、心を籍りて度する所ならんや。真如^{注3}は非相なり。詎^{注4}ぞ言を仮りて詮する所ならんや。是の故に、衆生は浩^{注5}瀚として窮り無く、法海は渺^{注6}茫として何ぞ極まらん。若し也^{注7}た広く文義を尋ぬるは、猶^{注8}お鏡の内^{注9}に形を求むるが如し。更に乃^{注10}ち念を息^{注11}めて空を觀るは、又た日中に影より逃れんとするに似たり。

此[※]経、喻如大地。何物不[※]從地之所生。諸^{※9}仏唯指一心。何法不[※]因心之所立。但[※]了心地。故^{※10}う總持。悟法無生、名[※]為妙覺。一念超越、豈^{※11}在繁論者^{注12}爾。

此の経は喻^{注13}うれば大地の如し。何物か地より生ずる所ならざらんや。諸^{注14}仏は唯^{注15}だ一心を指すのみ。何なる法か心^{注16}因り立つる所ならざらんや。但^{注17}だ心地を了^{注18}ずるのみ。故に總^{注19}持と号す。法の無生なるを悟らば、名^{注20}づけて妙覺と為す。一念超越せば、豈、繁論する者のしかる^{注21}こと^{注22}在らんや。

校記:

- ※1 底本は題名と著者名を断欠するも、B本により補う。
- ※2 底本は「夫」を断欠するも、B本、C本により補う。
- ※3 底本は「真」を断欠するも、B本、C本により補う。
- ※4 B本「瀚」を「浩」に作り、C本は「渺」に作る。
- ※5 B本は「渺茫」を「茫茫」に作り、C本は「汪洋」に作る。

- ※6 B本、C本は「内」を「裏」に作る。
- ※7 B本は「乃」を「及」に作る。
- ※8 B本、C本は「此」を「茲」に作る。
- ※9 底本は「号」より以下一五字断欠するも、B本、C本により補う。
- ※10 底本は「繁」を断欠するも、B本、C本により補う。
- ※11 底本は「者爾」を断欠するも、B本、C本により補う。

摩訶般若波羅蜜多心経

將釈経題、都有五句。以明衆生本心。

第一摩訶。

此是梵語、唐言大也。為破凡夫妄執塵境、堅著世間。故多隔礙。名之為塵。欲令衆生撰諸妄念、不染世間、悟心・境空、洞然含受十方世界。

第二般若。

此是梵語、唐言智慧。為破凡夫背心取境、堅執邪見、墮在愚癡。欲令衆生背境觀心、悟心無我。故名「般若」。

摩訶般若波羅蜜多心経

將に経の題を釈せんとするに、都て五句有り。以て衆生の本心を明らむ。

第一は摩訶なり。

此是れ梵語にして、唐には大と言ふなり。凡夫の妄りに塵境に執し、堅く世間に著するを破せんが為なり。故に、隔礙多し。これを名づけて塵と為す。衆生をして諸もろの妄念を撰し、世間に染らず、心・境の空なるを悟り、洞然として十方世界を含受せしめんと欲す。

第二は般若なり。

此是れ梵語にして、唐には智慧と言ふなり。凡夫の心に背きて境を取リ、堅く邪見に執して、愚癡に墮在するを破せんが為なり。衆生をして境に背きて心を観、心の無我なるを悟らしめんと欲す。故に「般若」と名づく。

校記：

- ※1 底本は「訶」より以下四字を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※2 底本のみは、「第一摩訶」から「第五心経」の五項目を見出しとする。
- ※3 A本、B本は「此」を欠く。
- ※4 A本、B本は「唐言大也」を「此翻為大」に作る。
- ※5 A本は「多」を「名」に作り、B本は「為」に作る。

- ※6 A本、B本は「塵」を「小」に作る。
- ※7 A本、B本は「界」の後に「故名摩訶也」に作る。
- ※8 A本、B本は「此」を欠く。
- ※9 A本、B本は「唐言智慧」を「此名智慧」に作る。
- ※10 A本、B本は「邪」を「我」に作る。
- ※11 A本、B本は「癡」を「痴」に作る。
- ※12 A本、B本は「若」の後に「也」に作る。

第三波羅。

此是梵語、唐言清淨。為破凡夫不悟自心、憑六根學、唯覽六塵、隨塵雜亂、墮於不淨。欲令衆生背境合覺、本來清淨。故名「波羅」。

第四蜜多。

蜜者和也。多者諸法。為破凡夫妄心求法、執著名相差別不同。欲令衆生返照自心、本含万法、和合無二、本來具足、無所欠少。故名「蜜多」也。

校記：

- ※1 A本、B本は「此」を欠く。
- ※2 A本は「此名清淨」に作り、B本は「此云清淨」に作る。
- ※3 A本、B本は「憑」を「認」に作る。
- ※4 A本、B本は「學」を「覺」に作る。
- ※5 A本は「唯覽」を「惟攬」に作る。
- ※6 A本、B本は「本來」を「覺本」に作る。

第三は波羅なり。

此是れ梵語にして、唐には清淨と言うなり。凡夫の自心を悟らず、六根に憑りて學び、唯だ六塵を覽、塵に隨いて雜亂し、不淨に墮するのみを破せんが為なり。衆生をして境に背きて覺に合し、本來より清淨ならしめんと欲す。故に「波羅」と名づく。

第四は蜜多なり。

蜜とは、和なり。多とは、諸法なり。凡夫の妄心もて法を求め、名相の差別不同なるに執着するを破せんが為なり。衆生をして自心の本より万法を含み、和合して二なく、本來より具足して欠少くる所無きを返照せしめんと欲す。故に「蜜多」と名づく。

- ※7 A本、B本は「羅」の後に「也」に作る。
- ※8 底本は断欠するも、A本、B本により補う。
- ※9 底本は「為」より以下約三二字を断欠するも、A本により補う。
- ※10 B本は「衆生」を欠く。
- ※11 底本は「所」を断欠するも、A本、B本により補う。

第五心経。

心経者即是大道也。為破凡夫不識本心、唯学多聞、分別名相、心隨境轉、輪廻六道、墮於邪見。欲令衆生反照心源、本來空寂、実無少法可得、無所分別、即帰大道也。

已上経題大意、只令自悟心源广大、智慧清浄、和合無二、本来具足、無所分別也。

校記：

- ※1 A本、B本は「心経者」を「是梵語」に作る。
- ※2 A本は「即是」を「此云」に作り、B本は「此名」に作る。
- ※3 底本は「為破」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※4 B本は「学」を「覚」に作る。
- ※5 底本は「聞」を断欠するも、A本、B本により補う。

觀自在菩薩。

此破凡夫歷劫背心、唯觀諸法、被法所拘、不得自在。大意只令衆生背境觀心、悟心無法可得。何以故、且如色法、因心而起、反觀起心、無有処所、実不可得。心尚自無、色従何有。猶如夢幻、不念不著。

第五は心経なり。

心経とは、即ち大道なり。凡夫の本心を識らず、唯だ多聞を学び、名相を分別し、心の境に随いて転じ、六道に輪廻し、邪見に墮するのみを破せんが為なり。衆生をして心源の本来より空寂にして、実に少かの法も得べきもの無く、分別する所無きを反照して、即ち大道に帰せしめんと欲す。

已上の経題の大意は、只だ自ら心源の广大なる、智慧の清浄なる、和合して二無く、本来より具足して、分別する所無きを悟らしむるのみ。

※6 B本は「反」を「返」に作る。

※7 A本は「也」を「名為心経」に作り、B本は「故名為心経」に作る。

※8 底本は「已」以下三二字を見出し並の大ききとする。

※9 B本は「大」を「本」に作る。

觀自在菩薩。

此れは、凡夫の歴劫に心に背きて、唯だ諸法を觀て、法に所拘るるを被むり、自在を得ざるのみを破せんとす。大意は只だ衆生をして境に背きて心を觀、心に法の得べきもの無きを悟らしむるのみ。何を以ての故とならば、且に色法の如きは、心に因りて起こり、反て起せし心を觀ば、(心は) 処所有ること無く、実に不可得なり。心は尚お自ら無くば、色は何こ従り有らんや。猶お夢幻の如く、念わす著せず。

※方於色法得自在、乃至一切法不可得、亦不被一切法所撰、一切処得自在。

如是人、悟心非心、了境無境、心境兩忘、無了可了、坦然無礙。故名「自在」。善之言了、薩之言見。了見諸法本來空寂。故名「菩薩」也。

校記：

※1 A本、B本は「歴」を「塵」に作る。

※2 底本は「心」を断欠するも、A本、B本により補う。

※3 底本は「起」を断欠するも、A本、B本により補う。

※4 底本は「心」より以下七字を断欠するも、A本、B本により補う。

行深般若波羅蜜多時。

此重拳經題意、更破小乘心外求法之人、不悟自心本來具足、妄求言教、以為智慧。名為「般若」。息諸妄念、以為清淨。故名「波羅」。見種々法、推析念空、合成一体為「蜜」。通達諸法、妄有修証、墮在聲聞、名淺般若。此是背心求法。

方めて色法において自在を得、乃至一切の法の不可得にして、亦た一切の法に所撰らるるを被むらず、一切の処にて自在を得。

是の如きの人は、心の心に非ざるを悟り、境に境無きを了り、心も境も兩つながら忘じ、了りの了るべき無く、坦然として無礙なり。故に「自在」と名づく。善は之れを了と言ひ、薩は之れを見と言ふ。諸法の本來より空寂なるを了見す。故に「菩薩」と名づく。

※5 底本は「如夢幻」を断欠するも、A本、B本により補う。

※6 底本は「方」より以下一九字を断欠するも、A本により補う。

なおB本は「方」を「方知」に作る。

※7 底本は「人悟」を断欠するも、A本、B本により補う。

※8 底本は「了坦」を断欠するも、A本、B本により補う。

行深般若波羅蜜多時。

此に重ねて經題の意を挙ぐるは、更に小乗の心の外に法を求むる人の、自心の本來より具足せるを悟らず、妄りに言教を求め、以て智慧と為すを破せんとす。名づけて「般若」と為す。諸もろの妄念を息むるを、以て清淨と為す。故に「波羅」と名づく。種々の法を見るに、推析する念も空なれば、合して一体と成るを、「蜜」と為す。諸法に通達するに、妄りに修証有りて、聲聞に墮在するを、淺般若と名づく。此是れは、心に背きて法を求むるなり。

今更^{※6}拳深般若、以明大乘、对破前病。菩薩了見諸法本来空寂、実無生滅。故名「深般若」。心本清浄、内外円明。故名「波羅」。心外無法、法外無心。心法無二。故名為「蜜」。性含万法、不仮修証。故名曰「多」。如是悟者、是名大乘、故名「行深般若波羅蜜多」。「時」、過去・現在・未來心、俱不可得。

校記：

- ※1 A本、B本は「更」を「為」に作る。
- ※2 A本、B本は「見種種法推折念空」を「所見本空」に作る。
- ※3 A本、B本は「体」の後に「名之」に作る。
- ※4 A本、B本は「通達諸法」を「通達諸法懷念記持名之為多」に作る。
- ※5 A本、B本は「妄有修証墮在声聞名淺般若此是背心求法」を

照見五蘊皆空、度一切苦厄。
五蘊者、色^{※2}受想行識^{※3}是也。違背^{※4}精明、日常^{※5}觀境。故名為色。貪求^{※7}諸法、希望修証。故名為受。攀緣^{※8}諸法、流出不息。故名為想。精持^{※9}禁戒、行頭陀事。故名為行。種々分別、隨法流轉。故名為識。

今、更に深般若^註を拳げ、以て大乘を明らめ、前病を対破せん。菩薩は諸法の本来より空寂にして、実には生滅無きを了見す。故に「深般若」と名づく。心は本より清浄にして、内外円明なり。故に「波羅」と名づく。心の外に法無く、法の外に心無し。心と法とは二無し。故に名づけて「蜜」と為す。性は方法を含み、修証を仮らず。故に名づけて「多」と曰う。是の如く悟る者は、是れを大乘と名づく。故に「行深般若波羅蜜多」と名づく。「時」とは、過去・現在・未來の心にして、俱に得べからず。

「此是背心求法妄有修証墮在声聞名淺般若」に作る。

- ※6 A本、B本は「拳」の後に「行」に作る。
- ※7 A本、B本は「無」を「不」に作る。
- ※8 A本、B本は「曰」を「為」に作る。
- ※9 B本は「過去現在」を「過現」に作る。
- ※10 底本は「來心俱」を断欠するも、A本、B本により補う。

照見五蘊皆空、度一切苦厄。
五蘊とは、色、受、想、行、識是れなり。精明に違背し、目もて常に境を觀る。故に名づけて色と為す。諸法を貪り求め、修証を希い望む。故に名づけて受と為す。諸法に攀緣し、流出して息まず。故に名づけて想と為す。禁戒を精持し、頭陀の事を行す。故に名づけて行と為す。種々に分別し、法に隨いて流轉す。故に名づけて識と為す。

凡夫之人、被此五法所障。不悟本心。故名爲陰。不出三界、輪廻不停。故名爲「苦厄」。菩薩反照心源、本來清淨、觀前五法、並無生処、本來空寂、實無纖毫可得。故云「照見五蘊皆空、度一切苦厄」也。

凡夫の人は、此の五法に所障さへられ、本心を悟らず。故に名づけて陰と爲す。三界を出でず、輪廻して停とどまらず。故に名づけて「苦厄」と爲す。菩薩は、自らの心源の本来より清淨なるを反照して、前の五法を觀るに、並すべて生ずる処無くば、本来より空寂にして、實には纖毫せんごうも得べき無し。故に「照見五蘊皆空、度一切苦厄」と云う。

校記：

- ※1 底本は「一切」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※2 底本は「色受」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※3 底本は「是也」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※4 底本は「背」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※5 B本は「目」を「因」に作る。

- ※6 底本は「求諸」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※7 底本は「不」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※8 A本、B本は「為」を「曰」に作る。
- ※9 A本、B本は「心源」を「了自心源」に作る。
- ※10 A本、B本は「也」を欠く。

舍利子。

此是身心二相、亦是重明五蘊之法。舍者是色。利子者是受・想・行・識。又舍者是人。利子是法。亦是法、亦是人。人法二相、此有多義、不可具宣。以要言之、此都是方法之根本。今、欲明万法不離身心。故名「舍利子」也。

舍利子。

此是れは身と心の二相にして、亦た是れ重ねて五蘊の法を明らめん。舍とは色なり。利子とは受・想・行・識なり。又た舍とは人なり。利子とは法なり。亦た法なれば、亦た人なり。人と法は二相にして、此に多義有るも、具には宣ぶるべからず。要を以て之れを言わば、此れは都て万法の根本なり。今、万法の身と心を離れざるを明らめんと欲す。故に「舍利子」と名づく。

色不異空。

凡夫妄執身心、便於心外見色。不知色因心有。

色不異空。

凡夫は妄りに身と心に執し、便ち心外において色を見る。色は心に因り

推心本無、色因何立。故云「色不異空」。

空不異色。

凡夫背心見法、謂言心外有空。不知空因心生。但悟自心、無空可得。空色不異、故云「空不異色」。

校記：

※1 B本は「相」に後に「更有苦厄也空身即法身何二相亦是」に作る。

※2 B本は「亦是」を欠く。

※3 A本、B本は「是受想行識又舍者是人利子是法亦是法亦是人」を

「是心受想行識此是五蘊又舍者人利子者亦是法亦是人」に作る。

※5 A本、B本は「身」を「自」に作る。
※6 A本、B本は「便」を「更」に作る。

※7 底本は「外有」を断欠するも、A本、B本により補う。

※8 底本は「不知」を断欠するも、A本、B本により補う。

※9 A本は「但」より一二字を欠く。
※10 底本は「自」より以下五字を断欠するも、B本により補う。

色即是空。

心起故、即色。心不得不異色故、即空。故云

「色即是空」。

空即是色。

前云「心起故、即色。心不得不異色故、即空」、此猶是空。色因心所生、今即不然。心正有之時、即是空。心正無之時、即是有。何以故。且衆生

て有るを知らず。心を推すに、本より無くば、色は何に因りてか立たん。故に「色不異空」と云う。

空不異色。

凡夫は心に背きて法を見、心外に空有りと謂言う。空は心に因りて生ずるを知らず。但だ自らの心を悟らば、空の得べき無し。空と色は異ならず。故に「空不異色」と云う。

色即是空。

心の起こるが故に、即ち色なり。心は得ざれば色に異ならざるが故に、即ち空なり。故に「色即是空」と云う。

空即是色。

前に、「心の起こるが故に、即ち色なり。心は得ざれば色に異ならざるが故に、即ち空なり」と云うは、此れ猶お空なり。色は心に因りて生ずる所なるも、今は即ち然らず。心の正に有るの時は、即ち空なり。

心正有^{※7}時、実無生^{※8}処。即是「色即是空」。心正無^{※9}時、現能^{※10}応用。即是「空即是色」。此先^{※11}拳身^{※12}心、一切^{※13}万法、例皆是也。故下文云。

心の正に無きの時は、即ち有なり。何を以ての故に。且つ衆生の心の正に有る時、実には生ずる処無し。即ち「色即是空」なり。心の正に無き時、能く^{※14}応に用を現わす。即ち「空即是色」なり。此れは先ず身と心を挙ぐるも、一切の万法、例えば皆な是なり。故に下の文に云う。

校記：

- ※1 底本は「心起故即」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※2 A本は「心不得不異色故」を「心不可得」に作り、B本は「心不可得故」に作る。
- ※3 底本は「云」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※4 A本、B本は「心不得不異色故」を「心不可得故」に作る。
- ※5 B本は「此」を欠く。
- ※6 A本、B本は「且」を「且如」に作る。
- ※7 A本、B本は「衆生心」を「衆生之心」に作る。

- ※8 A本、B本は「正有時」を「正生之時」に作る。
- ※9 A本、B本は「心正無時」を「心正無之時」に作る。
- ※10 A本、B本は「此」を欠く。
- ※11 A本、B本は「例皆是也」を「例皆如是」に作る。
- ※12 A本、B本は「故下文云」を「故云空即是色也」に作る。A本はその後さらに「色空二字包一切法混同一体真不二法門也」に作る。

受想行識、亦復如是。舍利子、是諸法空相。

受想行識、亦復如是。舍利子、是諸法空相。

非唯五陰、但了^{※15}心空、諸法自空。故云「是諸法空相」也。

唯だ五蘊のみに非ず、但だ心の空なるを了ぜば、諸法も自ずから空なり。故に「是諸法空相」と云う。

不生不滅、不垢不淨、不增不減。

不生不滅、不垢不淨、不增不減。

法法是心、心無^{※16}体段。有^{※17}何生滅。故云「不增不滅」等也。

法と法は心なれば、心は体として段無し。何の生滅か有らん。故に「不增不滅」等と云う。

是故空中、無色無受想行識。^{※3}

法性本空。^{※4}空中求色不可得。故云「無色」。

推心不可得。故云「無受想行識」。

無眼耳鼻舌身意。

此六根。凡夫確執妄繫為実、種々惡業、因果而生。故六根中、積業潤生、恒沙罪障、無有休息。此六根、以心為本。心若休復、根・境俱空、自然明徹。故云「無眼耳」等。

校記：

※1 B本は「陰」を「蘊」に作る。

※2 A本、B本は「有何生滅故云不增不減等也」を「有何生滅垢淨増減」に作る。

※3 底本は「行識」を断欠するも、A本、B本により補う。

※4 底本は「性本」を断欠するも、A本、B本により補う。

※5 底本は「空中求」を断欠するも、A本、B本の「故云空中求」により字数を三字にあわせて補う。

※6 底本は「云無」を断欠するも、A本、B本により補う。

※7 底本は「識」を断欠するも、A本、B本により補う。

無色声香味触法。

此六塵。因六根所覽、引起成勞、塵汚真智。故名爲塵。但能反推一根、無有主宰。根既無主、

是故空中、無色無受想行識。

法の性は本より空なり。空の中に色を求むるも得べからず。故に「無色」と云う。心を推さば得べからず。故に「無受想行識」と云う。

無眼耳鼻舌身意。

此れは六根なり。凡夫は確執し妄繫して実と爲し、種々の惡業、因と果にして生ず。故に六根の中に、業を積みて生を潤し、恒沙の罪障、休息有ること無し。此の六根は、心を以て本と爲す。心、若し休復せば、根・境俱に空じ、自然に明徹す。故に「無眼耳」等と云う。

※8 A本、B本は「此六根」を「此名六根」に作る。

※9 A本、B本は「因果」を「因茲」に作る。

※10 A本、B本は「故六根中」を「故名爲根一一根中」に作る。

※11 A本は「此六根」を「知此六根」に作り、B本は「此六知根」に作る。

※12 A本、B本は「復」を「伏」に作る。

※13 A本は「徹」を「激」に作る。

※14 A本、B本は「無眼耳等」を「無眼耳鼻舌身意也」に作る。

A本はその後さらに「経云一根既反源六根成解脱見聞如幻譬三界若空花聞復医根除塵消覺円淨」に作る。

無色声香味触法。

此れは六塵なり。六根に因りて覽らるる所にして、引き起さば勞と成り、塵もて真智を汚す。故に名づけて塵と爲す。但だ能く一根を反推す

塵境自亡。[※]

無眼界乃至無意識界。

此十八界。『經』文略拳眼界、即諸界可知。因六根生六塵、生六識。故成十八界。流出分別、各各不同。故名爲「界」。從無量劫來、妄繫造業、循逐色・声、不覺不知。隨念流轉、不悟衆生本性無異。但能想念不生、法□塵色、応時消落。故云無根塵等。[※]

校記：

- ※1 A本、B本は「此六塵」を「此名六塵」に作る。
- ※2 A本、B本は「六」を欠く。
- ※3 A本は「覽」を「攬」に作る。
- ※4 A本は「塵汚」を「坌汙」に作り、B本は「坌汚」に作る。
- ※5 A本、B本は「根既」を「六根」に作る。
- ※6 A本、B本は「亡」の後に「故名爲無色声香味触法」に作る。
- ※7 A本は「此」の後に「云」に作り、B本は「名」に作る。
- ※8 A本、B本は「文」を欠く。
- ※9 A本、B本は「生六塵」の後に「因六塵」に作る。
- ※10 A本は「生六識」の後に「為三六十八」に作り、B本は「三六既為十八」に作る。

るに、主宰有ること無し。根既に主無く、塵境も自ずから亡ず。

無眼界乃至無意識界。

此れは十八界なり。『經』文には略して眼界を拳ぐるも、即ち諸界も知るべし。六根に因りて六塵を生じ、六識を生ず。故に十八界と成る。分別を流出せば、各各同じからず。故に名づけて「界」と爲す。無量劫より、妄繫して業を造り、色、声に循いて逐い、覺らず知らず。念に隨いて流轉し、衆生の本性の異なること無きを悟らず。但だ能く想念を生ぜざれば、法□塵色、時に応じて消落す。故に根も塵も無し等と云う。

- ※11 A本、B本は「成」を「名」に作る。
- ※12 A本、B本は「故名爲界」を「名之爲界」に作る。
- ※13 A本、B本は「來」を欠く。
- ※14 A本、B本は「繫」を「計」に作る。
- ※15 A本、B本は「循」を「隨」に作る。
- ※16 A本、B本は「性元無異」を「本性無異」に作る。
- ※17 A本、B本は「法□塵色」を「塵根識心」に作る。
- ※18 A本、B本は「故云無根塵等」を「故名爲乃至無意識界」に作る。

無無明。

※1 迷人執有五陰・十八界・障覆本性、不觀光明。
※2 悟達本心、根・塵本空。意識無用、無有障礙。
故云「無無明」。

亦無無明尽。乃至無老死、

境・塵是有、即有可尽。本心是無、將何為尽。

從無明至老死、並是十二因緣。今但舉一緣以
用例諸。無明若是有、老死即不虛。無明從本無。
故云「無老死」也。

亦無老死尽。

尽者滅也。十二因緣若有、即老死可尽。因緣
本無。故云「無老死」也。

校記：

- ※1 底本は「執有」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※2 A本、B本は「陰」を「蘊」に作る。
- ※3 底本は「十八」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※4 底本は「觀光」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※5 A本、B本は「悟」の前に「故名無明」に作る。なおB本は「悟」を「性」に作る。

無無明。

迷える人は五蘊・十八界有りと執し、本性を障覆して、光明を觀ず。
悟りて本心に達せば、根・塵、本より空なり。意識に用無くば、障礙も
有ること無し。故に「無無明」と云う。

亦無無明尽。乃至無老死、

境・塵是れ有ならば、即ち尽すべき有り。本心是れ無ならば、何を將
てか尽と為さん。

無明従り老死に至るは、並て是れ十二因緣なり。今は但だ一縁を挙ぐ
るを以て諸もろに例う。無明、若し是れ有ならば、老死も即ち虚なら
ず。無明は從本無し。故に「無老死」と云う。

亦無老死尽。

尽とは滅なり。十二因緣若し有らば、即ち老死は尽すべし。(十二) 因
緣本より無し。故に「無老死」と云う。

- ※6 底本は「根塵」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※7 A本、B本は「無有障礙」を「有何障礙」に作る。
- ※8 A本、B本は「乃至無老死尽」を新たに見出しをたてる。
- ※9 A本、B本は「境塵」を「塵境」に作る。
- ※10 A本、B本は「心」を「來」に作る。
- ※11 底本は「無為」に作るも、A本、B本により「無明」に改む。

- ※12 B本は「従本無」を「從來無」に作る。
- ※13 A本、B本は「有」を「生」に作る。
- ※14 A本は「即老死」を「即有老死」に作り、B本は「即有生死」に作る。

- ※15 A本、B本は「故云」を「即」に作る。
- ※16 A本、B本は「也」を欠く。

無苦集滅道。

此四諦。心有所求、繫著於法。故名諦。精麤修証、心無間歇。名「苦」。広尋經論、貪求妙理。名「集」。断諸妄念、至求常寂。名「滅」。遠離煩乱、精研仏理。名「道」。

今更明四聖諦。名藥、以破前病。心本清虚、不関修証、名苦諦。性含万法、豈籍尋求、名集諦。妄念無生、本自常寂、名滅諦。淨(穢無カ)二、邪正不殊。名道諦。此对病之説。若了無心、四諦何有。故云「無苦集滅道」。

無苦集滅道。

これは四諦なり。心に求むる所有らば、法に繫著す。故に諦と名づく。修証に精麤し、心に間歇無し。「苦」と名づく。広く經論を尋ね、妙理を貪り求む。「集」と名づく。諸ものを妄念を断じ、常に寂なるを至求す。「滅」と名づく。煩乱を遠離し、仏理を精研す。「道」と名づく。

今更に四聖諦を明らむ。藥と名づけて、以て前病を破す。心は本より清虚にして、修証に関わらず。苦諦と名づく。性は万法を含まば、豈尋求するを籍らんや。集諦と名づく。妄念は無生にして、本自より常に寂なり。滅諦と名づく。淨(と穢は無)二にして、邪正は殊ならず。道諦と名づく。此れは病に対するの説なり。若し無心を了らば、四諦は何ぞ有らん。故に「無苦集滅道」と云う。

校記：

- ※1 A本、B本は「此四諦」を「此明四諦」に作る。
- ※2 A本、B本は「故名諦」を「故名為諦」に作る。
- ※3 A本、B本は「勤」を「勤」に作る。
- ※4 A本、B本は「名苦」を「名為苦諦」に作る。
- ※5 A本、B本は「名集」を「名為集諦」に作る。
- ※6 A本、B本は「名滅」を「名為滅諦」に作る。

- ※7 A本、B本は「名道」を「名為道諦」に作る。
- ※8 A本、B本は「名藥」を「名之為藥」に作る。
- ※9 A本、B本は「以」を「对」に作る。
- ※10 B本は「虚」を「靈」に作る。
- ※11 A本、B本は「関」を「板」に作る。
- ※12 A本、B本は「名苦諦」を「名為苦諦」に作る。

※13 A本、B本は「名集諦」を「名為集諦」に作る。
 ※14 A本、B本は「名滅諦」を「名為滅諦」に作る。
 ※15 底本は「淨」以下二字を断欠する。A本、B本は「寂常無」に作るため、校訂不能が、文意により「穢無」の二字を補う。

※16 A本、B本は「殊」を「味」に作る。

無智亦無得。

推照諸法、了無所得。名「智」。諸法本空、何仮推照。故云「無智」。有法可証。名「得」。自性清虚、実無一法。故云「無得」。

以無所得故、菩提薩埵。

了諸心不可得。故名「菩提」。了諸法不可得。故名為「薩埵」。心法一如、並無所得。故名「菩提薩埵」。

校記：

※1 底本は「無所」を断欠するも、A本、B本により補う。
 ※2 A本、B本は「名智」を「名之為智」に作る。
 ※3 A本、B本は「有法可証名得」を欠く。
 ※4 B本は「虚」を「靈」に作る。
 ※5 A本、B本は「一法」を「一法可得」に作る。

無智亦無得。

諸法を推照するに、了かに得る所無し。「智」と名づく。諸法は本より空なれば、何ぞ推照するを仮らん。故に「無智」と云う。法の証すべき有り。「得」と名づく。自性は清虚にして、実には一つの法も無し。故に「無得」と云う。

以無所得故、菩提薩埵。

諸もろの心の得べからざるを了る。故に「菩提」と名づく。諸もろの法の得べからざるを了る。故に名づけて「薩埵」と為す。心と法は一如にして、並て得る所無し。故に「菩提薩埵」と名づく。

※6 A本、B本は「無得」を「亦無得也」に作る。
 ※7 A本、B本は「了」を「悟」に作る。
 ※8 A本は「心」を「法」に作る。
 ※9 A本は「名」を「即是」に作り、B本は「是」に作る。

依般若波羅蜜多故、心無罣礙。

此是梵語、經題具釈。只是衆生智慧清淨、無可分別。反照自心、離諸塵妄。故名「依般若波羅蜜多」。微有少法可得、即是罣礙。心境自空、誰念誰著。寂然無事、有何罣礙。

無罣礙故、無有恐怖。

心無所著、有何所求。心不可得、無有恐怖。

故云「無有恐怖」。

校記：

※1 B本は「是」を欠く。
※2 A本、B本は「無可分別」を「亦無清淨可得」に作る。
※3 B本は「妄」を欠く。
※4 A本、B本は「名」を「云」に作る。
※5 A本は「少法可得」を「少法」に作り、B本は「小法」に作る。

遠離顛倒夢想。

心外求法、名「顛」。心内觀空、名「倒」。無中計有、名「夢」。心有所緣、名「想」。忽悟心

校注「般若心經慧忠注」(程)

依般若波羅蜜多故、心無罣礙。

此是梵語にして、經題にて具に釈す。只是だ衆生の智慧は清淨にして、分別すべき無し。自らの心を反照し、諸もろの塵妄を離る。故に「依般若波羅蜜多」と名づく。微かに少法の得べきもの有らば、即ち罣礙なり。心も境も自ずから空なれば、誰か念い、誰か著せん。寂然として無事なれば、何の罣礙か有らん。

無罣礙故、無有恐怖。

心に著する所無くば、何の求むる所か有らん。心の得べからざれば、恐怖有ること無し。故に「無有恐怖」と云う。

※6 A本、B本は「是」を「有」に作る。
※7 A本、B本は「寂」を「迴」に作る。
※8 底本は「心如□□」に作るも、A本、B本により「心不可得」に作る。
※9 A本、B本は「無有恐怖」を「恐怖誰生」に作る。

遠離顛倒夢想。

心の外に法を求むるを、「顛」と名づく。心の内に空を觀るを、「倒」と名づく。無の中に有を計るを、「夢」と名づく。心の緣る所有るを、

源、了無所得。^{※10}故云「遠離顛倒夢想」。

究竟涅槃。

心若有生、^{※12}即有可滅。心本無生、實無可滅。^{※13}故名「涅槃」。究者窮也、竟者尽也。窮尽三世塵勞・妄念、本無生滅、故名「究竟涅槃」。

「想」と名づく。忽ち心源を悟らば、了らかに得る所無し。故に「遠離顛倒夢想」と云う。

究竟涅槃。

心に若し生ずること有らば、即ち滅すべきも有り。心は本より生ずること無くば、実には滅すべきも無し。故に「涅槃」と名づく。究とは窮なり、竟とは尽なり。三世の塵勞・妄念は窮尽して、本より生滅無し。故に「究竟涅槃」と云う。

校記:

- ※1 A本、B本は「遠離」を「遠離一切」に作る。
- ※2 底本は「想」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※3 A本は「名顛」を「名之為顛」に作り、B本は「為顛」に作る。
- ※4 底本は「心内」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※5 A本、B本は「為倒」を「名之為倒」に作る。
- ※6 底本は「中計有」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※7 A本、B本は「名夢」を「名之為夢」に作る。
- ※8 A本、B本は「有」を「之」に作る。

- ※9 A本、B本は「名想」を「名之為想」に作る。
- ※10 底本は「所得」を欠くも、A本、B本により補う。
- ※11 A本、B本は「遠離」を「遠離一切」に作る。
- ※12 底本は「生即」を欠くも、A本、B本により補う。
- ※13 A本、B本は「滅」の後に「無生無滅」に作る。
- ※14 A本、B本は「窮尽」を欠く。
- ※15 A本、B本は「名」を「云」に作る。

三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。故知般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等々呪。

呪者契也。如来密印、心行俱契。故名呪。又

三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。故知般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等々呪。

呪とは契なり。如来の密印にして、心と行とが俱に契うなり。故に呪

呪者定也。自達本際、無有動・靜。又呪者無也。無心見故、名呪。此有多義、不可具宣。衆生本心、無有涯際、往反無礙、實不動搖。故名爲大神呪。心本清淨、湛然常住、円照法界、応現無窮。是大明呪。一切方法、不出於心、無能越者。是無上呪。心之一字、不属有無、罔測辺際、不可比況、是無等々呪也。

校記：

- ※1 A本、B本は「三世諸仏・・・得阿耨多羅三藐三菩提」を切り離して、新たな見出しとして立て、その下に百余字（A本は一〇八字、B本は一〇六字）の釈文を付している。
- ※2 A本、B本は「故名」を「故名為」に作る。
- ※3 A本、B本は「本際」を「本心」に作る。
- ※4 底本は「無也無」を欠くも、A本、B本により補う。
- ※5 A本、B本は「見故名呪」を「見心故名為呪」に作る。
- ※6 底本は「衆生本」を欠くも、A本、B本により補う。
- ※7 A本、B本は「涯際」を「辺際」に作る。

能除一切苦、真実不虛。

一切諸仏、因此呪心、独超三界、不受輪廻。故云「能除一切苦」。直指本心、決定是仏、不仮修証。故云「真実」。心無變異、離諸誑惑、坦然常住。故云「不虛」也。

と名づく。又た呪とは定なり。自ら本際に達すれば、動・靜有ること無し。又た呪とは無なり。無心もて見るが故に、呪と名づく。此れに多義有るも、具には宣ぶるべからず。衆生の本心は、涯際有ること無く、往反するに礙無く、実には動搖せず。故に名づけて「大神呪」と爲す。心は本より清淨にして、湛然として常に住し、円かに法界を照して、応現するに窮まり無し。是れ「大明呪」なり。一切の方法は、心を出でず、能く越ゆる者無し。是れ「無上呪」なり。心の一文字は、有無に属せず、辺際を測ること罔く、比況すべからず。是れ「無等々呪」なり。

- ※8 底本は「往反無礙実不動搖故名爲」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※9 底本は「清淨湛然常住円照法界心」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※10 底本は「於心無」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※11 A本、B本は「越」を「超」に作る。
- ※12 底本は「属有」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※13 A本、B本は「不可比況」を「無能比者」に作る。
- ※14 底本は「也」を断欠するも、A本、B本により補う。

能除一切苦、真実不虛。

一切の諸仏は、此の呪の心に因りて、独り三界を超え、輪廻を受けず。故に「能除一切苦」と云う。本心を直指せば、決定して是れ仏にして、修証を仮らず。故に「真実」と云う。心に変異無く、諸もろの誑惑を離れ、坦然として常に住す。故に「不虛」と云う。

故説般若波羅蜜多呪。

呪※5是衆生本心。以言指心。故云「般若波羅蜜多呪」。

即説呪曰。

發言詮性。故云「即説呪曰」。

掲諦掲諦。

繫著※7名諦、掲者除。塵勞・妄念、智慧蕩除。

故云「掲諦」。又掲諦者、悟身空。又掲諦者、了心空。悟人法兩空。

波羅掲諦。

有何妄念※9可除。故云「波羅掲諦」。

波羅僧掲諦。

清浄為対塵勞得名。塵勞本無※11、清浄何立※12。菓病□□□□別。故名「波羅僧掲諦」也。

故説般若波羅蜜多呪。

呪とは、衆生の本心なり。言を以て心を指す。故に「般若波羅蜜多呪」と云う。

即説呪曰。

言を發して性を詮あぶりす。故に「即説呪曰」と云う。

掲諦掲諦。

繫著※7を諦と名づけ、掲とは除なり。塵勞・妄念は、智慧とうじもて蕩除※18す。故に「掲諦」と云う。又た掲諦とは、身の空なるを悟る。又た掲諦とは、心の空なるを了る。人・法の兩つながら空なるを悟る。

波羅掲諦。

何の妄念※9の除くべきことか有らん。故に「波羅掲諦」と云う。

波羅僧掲諦。

清浄は塵勞に對するが為に名を得。塵勞の本より無くば、清浄何ぞ立たん。菓病□□□□別。故に「波羅僧掲諦」と名づく。

校記：

- ※1 A本、B本は「因」を「依」に作る。
- ※2 B本は「異」を「体」に作る。
- ※3 A本、B本は「誑」を「狂」に作る。
- ※4 A本は「也」を「矣」に作るも、B本は欠く。
- ※5 A本、B本は「呪是」を「呪者只是」に作る。
- ※6 A本、B本は「呪」の後に「也」に作る。
- ※7 A本、B本は「除」の後に「也」に作る。
- ※8 A本は「又掲諦者悟身空又掲諦者了心空悟人法兩空」を「又掲諦者了心空悟身空了悟身心空寂無有二法故云掲諦掲諦」に作り、B本は「又掲諦者了心空悟身空寂了悟身心空寂無有二法故云掲諦掲諦」に作る。

菩提婆娑訶^{※1}

菩提是道、薩婆訶是行。悟達本性、悟即是「菩提」^{※3}。菩提言了、薩婆訶言見。了見本心、實無生処、故云「薩婆訶」^{※4}。又菩提是心、薩婆訶是一切法。本來是心。故云「薩婆訶」。

如^{※5}是神呪、直指本、無動・靜。不可起心求心、心無生滅。不可以生滅求心、非内外・中間。不可向内外・中間求。心非一切処求、求不可得。即知、無一切心。以無一切心故、即一切境撰不動。以不動故、即知降一切魔。『經』云、「降魔

校注『般若心經慧忠注』(程)

※9 A本「有」の前に「心既清淨」に作り、B本は「心已清淨」に作る。

※10 底本は「除故云」を断欠するも、A本、B本により補う。

※11 底本は「淨為對應勞得名塵勞本無」を断欠するも、A本により補う。なおB本は「淨而對應勞得名塵勞本無」に作る。

※12 A本、B本は「何」を「不」に作る。

※13 底本は「藥病□□□別」の内、四字断欠。なおA本、B本はいずれもこの一句を欠いて、校訂不能。

※14 A本、B本は「名」を「云」に作る。

菩提婆娑訶。

菩提とは道にして、薩婆訶とは行なり。本性を悟達し、悟らば即ち菩提なり。菩提とは了を言い、薩婆訶とは見を言う。本心を了見せば、實には生無きの処なり。故に「薩婆訶」と云う。又た菩提とは心にして、薩婆訶とは一切の法なり。本來^{※6}是れ心なり。故に「薩婆訶」と云う。

是の如く神呪は、本を直指して、動・靜無し。心を起こして心を求むるべからず、心は生滅無し。生滅を以て心を求むるべからず、内外・中間に非ず。内外・中間に向かい求むるべからず。心は一切の処に求むるに非ざれば、求むるも不可得なり。即ち、一切の心無きを知る。一切の心無きを以ての故に、即ち一切の境を撰して動ぜず。動ぜざるを以ての

是道場、不傾動故」。竊見時人、不了自心、以治他病。心外見法、魔境現前、自心屬魔。云何救彼。「經」云、「自疾不能救、云何救他疾」。縱令治得、業繫幻身。只是小鬼劣魔、懼其雄豪。自家隨境、未免輪廻。捨生趣生、互為冤對。如來出世、為度沈迷。令悟本心、号为神呪。不起妄念、名曰受持。了本無生、故名持念。恒沙教法、只為攀緣。一念不生、諸緣頓息、無辺病本、隨念消除、歷劫罪山、一時崩倒。如是功德、不可思議。拯拔群迷、頓超位、蜜持斯法。是大悲心。智者心行、愚人口誦。經文具載、理甚分明。聞者審詳、心無差謬矣。

校記:

- ※1 底本は「菩提姿」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※2 底本は「達本性」を断欠するも、A本、B本により補う。
- ※3 A本、B本は「悟即是菩提」を「即是道行」に作る。
- ※4 B本は「又」を欠く。
- ※5 底本は「一如」より以下の文字が見出しと同じ大ききになる。
- ※6 A本は「本」を「本心心」に作り、B本は「本心」に作る。

故に、即ち一切の魔を降ずるを知る。「經」に云く、「降魔是れ道場、傾動せざるが故に」と。竊に時人を見るに、自心を了らずして、以て他の病いを治せんとす。心の外に法を見れば、魔境現前し、自心も魔に属す。何云ぞ彼を救えん。「經」に云く、「自らの疾いを救うこと能わざれば、云そ他の疾いを救えん」と。縦い治することを得せしむるも、業は幻身に繋がる。只だ是れ小鬼・劣魔の其の雄豪に懼るのみ。自家の境に随いて、未だに輪廻を免れず。生を捨てて生に趣き、互いに冤對を為す。如來の出世せるは、沈迷を度せんが為なり。本心を悟らしむるを、号して神呪と為し、妄念を起こさざるを、名づけて受持と曰う。本より不生なるを了る、故に持念と名づく。恒沙の教法は、只だ攀縁の為なり。一念不生なれば、諸縁も頓ちに息め、無辺の病いの本は、念に随いて消除し、歴劫の罪の山も、一時に崩れ倒る。是の如き功德は、不可思議なり。群迷を拯拔して、頓ちに位位を超え、蜜に斯の法を持つ。是れ大悲心なり。智者は心もて行じ、愚人は口もて誦す。經文には具に載せ、理は甚だ分明なり。聞く者は審詳し、心に差謬すること無からん。

- ※7 A本は「不可将心滅心非」を「不可将心滅心心非」に作り、B本は「不可将心滅心無」に作る。
- ※8 A本は「不可向内外中間求心非一切処求求不可得」を「不可向内外中間求心非一切処不可向一切処求求不可得故」に作り、B本は「求心心非一切処不可向一切処求心心不可得故」に作る。
- ※9 A本、B本は「境」を「魔境」に作る。

※10 底本は「動故即知降一切魔經云降魔是道場不傾」を断欠するも、A本、B本により補う。

※11 A本、B本は「竊」を「切」に作る。

※12 底本は「心以」を断欠するも、A本、B本により補う。

※13 A本、B本は「疾」を「病」に作る。

※14 A本、B本は「只是小鬼劣魔懼其雄豪自家隨境」を「即是不出魔境界怕怖生死」に作る。

※15 底本は「沈迷令悟本心号为神呪不起妄念名曰受持了本無生故名」を断欠するも、A本により補う。なおB本は「沈迷令悟本心号为神呪不起妄念名曰受持了本不生故名」に作る。

※16 A本、B本は「教法」を「妙教」に作る。

※17 B本は「為」を「為息」に作る。

※18 底本は「縁」を断欠するも、A本、B本により補う。

※19 A本、B本は「崩倒」を「摧倒」に作る。

※20 A本、B本は「蜜持」を「密伝」に作る。

※21 A本、B本は「是大悲心」を「故号大悲」に作る。

※22 A本、B本は「聞」を「学」に作る。

※23 A本、B本は「心」を欠く。

語注：
注1、慧忠……（七七五）越州諸暨（浙江省諸暨県）の人。

俗姓は冉姓。若くして六祖慧能に学び、その法を嗣いだ。慧能の寂後、諸山に遊歴し、南陽（河南省）の白崖山党子谷に入り、四〇余年間、山門を下らなかつた。その高名により、朝廷に迎えられ、肅宗、代宗が師の礼をとつた。彼は、行思、懷讓、神会、玄覺とともに慧能門下の五大宗匠とされ、神会と同様に北方に禪風を揚げ、馬祖道一が南方で唱導する禪を

批判した。その禪風は身心一如、即心是仏を旨とし、また無情説法を初めて唱えた。さらに、南方の禪者が、經典を軽んじて隨意に説法するのを排し、広く経律論を究め、教学を重んじて師説のよりどころとした。大曆一〇年（七七五）示寂の後、代宗は大証国師と諡した。「祖堂集」卷三、「宋高僧伝」卷九、「景德伝灯録」卷五、「五灯会要」卷三、「五灯会元」卷二、「仏祖歴代通載」卷一三に伝あり。

注2、法性……あらゆる存在の眞実なる本質のこと。万有の根源をいい、仏教の眞理を示す語で、眞如、実相、法界などと同義。

注3、眞如……眞実そのものの意。前項の法性と同義。

注4、浩瀚……水の広大なさま、広く限らないこと。「淮南子」卷二、「傲眞訓」に「有無者、視之不見其形、聽之不聞其声、捫之不可得也、望之不可極也、儲与扈冶、浩浩瀚瀚、不可隱儀揆度而通光耀者。」（楠山春樹「淮南子 上」〈新釈漢文大系 54〉明治書院、一九七九年、八四頁）とある。

注5、法海……法性海の略で、法性を海広大さに譬えたもの。

注6、渺茫……限りなく、広大なさま。かすかではっきりしないこと。「統高僧伝」卷六、「僧肇伝」に、「涅槃之道也、蓋是三乘之所歸、方等之淵府。渺茫希夷、絶視聽之域。幽致虚玄、非群情之所測」（T50—366a）とある。

注7、猶如鏡内求形……あり得ない、不可能の譬え。仏教では、鏡中の像（形）が、無自性、或いは自体のない譬えとして用いられる。たとえば、『四卷楞伽』卷三、一切仏語心品之三に、「譬如鏡中像、雖現而非有。」（T16—505a）とあり、『大智度論』卷六に、「諸法徒因縁生、無自性、如鏡中像。」（T25—105a）とあり、『大乘起信論』に、「是故一切法、如鏡中像、無体可得。」（T32—577b）とある。

注8、似日中逃影、「云々……日中の日差しの中で、自分の影から逃れようとするような行為は、無駄な無益なことの譬え。七二七年に成立の浄寛の『般若心経注』にも、「捨生死外覓菩提、棄煩惱別求淨土、如逃形避影、転益身疲、嫌跡遠藏、弥加脚倦。」とある。

注9、喻如大地……大地に喩える意。初期禅宗と深いかわりをもつとされる偽経『仏説法王経』には、「仏告虚空藏菩薩言、『我説一乗道法、猶如一地、能生万物、長養一切。』（下略）』（T85—1385a）とある。

注10、一心……一仏心の略で、仏性、如来蔵と同義。あらゆるもの真実のありようを指す。『四卷楞伽』巻一、一切仏語心品之一に、「寂滅者、名爲一心。一心者、名爲如来蔵。」（T16—519a）とある。

注11、心地……一仏心そのものの意。前項の一心とは、同義。心には一切法・一切功德を増長させるはたらきがあるのを、大地の草木百穀を生じ増長させるはたらきになぞらえて心地と云う。

注12、總持……梵語Dharaṇīの音訳して陀羅尼の訳語で、すべてを保持して、漏失しないこと。

注13、一念超越、豈在繁論者爾……一念を超越したならば、どうして繁雑に論ずる者にそのような悟りはいえようか、ない、という意味。一念を超越するとは、念に執らわれない、つまり、「無念」の意。『六祖壇経』に、「無念者、於念而不念。」（楊曾文『新版・敦煌新本六祖壇経』宗教文化出版社、二〇〇一年、一九頁）とあるように、その念に対する解釈は、もつとも南宗禅の特色を示すものである。

注14、隔礙……隔も礙も、へだたること。隔離と同義。『八十華嚴』巻二一、十無尽蔵品に「是爲菩薩摩訶薩第十弁蔵。此蔵

無窮尽、無分段、無間無斷、無變異、無隔礙、無退転、甚深無底。」（T10—114b）とある。

注15、塵汚……塵で汚してしまふこと。

注16、「経」文……『般若心経』の本文のこと。

注17、無心……何ものにも、執らわれない、本来の仏心を指す。

注18、蕩除……はらいのけること。『弘明集』巻八、弁惑篇第二之四の「元魏太武廢仏法詔」に「便以太平真君七年三月下詔。一切蕩除。所有圖像胡經皆擊破焚毀。沙門無少長悉坑之。」（T52—135c）とある。

注19、無生……文字通りには、生ずることがないこと。あらゆるものが空としてあり、実としては生滅変化することがないことをいう。初期禅宗では、神會の「頓悟無生般若頌」の表題にもみられるように、涅槃や悟りなどが同義とされていた。

注20、本来是心……あらゆる現象は、ただこの心によつてのみ存在していることをいう。初期禅宗思想の形成に大きな影響を及ぼしたとされる『大乘起信論』に、「以一切色法、本来是心。実無外色。若無色者、則無虚空之相。所謂一初境界唯心妄起故有。若心離於妄動、則一切境界滅、唯一真心、無所不遍。此謂如来广大性智究竟之義。」（T32—580a）とある。

注21、不可起心求心、云々……全く同一の句は見出せないが、「少室六門」の「悟性論」に「是以聖人亦不將心求法。亦不將法求心。亦不將心求心。亦不將法求法。所以心不生法、法不生心、心法兩寂。」（T48—371b）とある。

注22、「経」曰、「降魔是道場、不傾動故。……『維摩経』の引用。すなわち、『維摩詰所説経』巻上、菩薩品第四に、「一切

法是道場、知諸法空故。降魔是道場、不傾動故。三界是道場、無所趣故。」(T14—543a)とある。

注23 『經』云、「自病不能救、何救他疾。」……『央掘魔羅經』の引用。すなわち、『央掘魔羅經』卷二に、「有如癩病人、而為諸世間、広説治癩方、自病不能救、安能療他疾。」(T2—523a)とある。

注24 一念不生……南宗禅の特色とする「無念」の立場を示すもの。『六祖壇經』に、「是以立無念為宗。即緣迷人於境上有念、念上便起邪見、一切塵勞妄念從此而生。」(楊曾文『新版・敦煌新本六祖壇經』宗教文化出版社、二〇〇一年、一九頁)とあるように、その念は、まさに「一念不生」の念に当たるものである。一方、六祖慧能とほぼ同じ時期に活躍した華嚴宗の法蔵の『華嚴一乘教義分齊章』卷一には、「頓者、言說頓絶、理性頓顯、解行頓成、一念不生。即是仏等。故『楞伽』云、(頓者、如鏡中像、頓現非漸。)此之謂也。」(T45—481b)とあり、卷二には、「若依頓教、一切行位皆不可説。以離相故。一念不生即是仏故。若見行位差別等相。即是顛倒故。」(T45—486b)とあり、同じく卷二には、「若依頓教、一切時分、皆不可説。但一念不生、即是仏故。一念者、即無念也。時者、即無時也。余可準思。」(T45—491a)とある。そのほかに、法蔵の『華嚴經探玄記』にも、「四、頓教者、但一念不生、即名為仏。不依位地、漸次而説。故立為頓。」(T65—115c)とある。

注25 智者心行、愚人口誦……智慧のある人は、心を以て実践し、修行するのに対して、愚かなものは、ただ口で唱えるのみ、という意味。『六祖壇經』には、「迷人口念、智者心行。」(楊曾文『新版・敦煌新本六祖壇經』宗教文化出版社、二〇〇一